長引く意味交渉では何が行われているのか
－日本人学生と留学生の接触場面に注目して－

久保亜希(防衛大学校)　酒井晴香(東京国際大学)　篠崎佳恵(TCJ グローバル)

1. はじめに

日本語母語話者（NS）と非母語話者（NNS）の接触場面において，コミュニケーションに支障が生じた際は，言語的・身体的なメッセージの産出方法を変えて調整する「意味交渉(negotiation of meaning)[1)]」によって解決が図られることが多い．意味交渉が生じた際は，どのように自分や相手の発話を調整・修正し，相互理解を図るのかが重要となる．NS が主導する意味交渉を経験することは，NNS 側にとってその後自分が遭遇するコミュニケーションの滞りに対処するための手段を知ることにもつながるため，その詳細を明らかにする必要があるだろう．本研究では日本語母語話者の大学生 NS と留学生 NNS の接触場面を対象として，会話の中で意味交渉が長引く事例を記述する．特に，ある一つの発話意図の実現に至る過程について，NNS の発話に対する NS 側の調整に注目してやりとりを描くことで，意味交渉が成功に至るための要因の一端を明らかにすることを目的とする．

2. 先行研究と本研究の目的

第二言語習得研究を背景とした接触場面における意味交渉の研究では，NNS の中間言語や NS による調整行動が記述され，言語習得に効果的とされる理解可能なインプット(comprehensive input)をめぐり，その産出を支える具体的な言語使用等が明らかにされてきた（宮崎，2002）．接触場面での意味交渉に注目した研究では，NS の接触経験と調整方法との関係に注目した研究（柳田，2010；雷，2021），調整の種類や成功率に注目した研究（大平，1999）などがある．

大平（1999）は NS による自己調整の種類と成功率に注目し，調整を 11 種類に分類している．分析の結果，一番多く観察されたのは「繰り返し」であったが，これは成功率が低く，英語などの他言語を使用した調整の成功率が高かったことを報告している．しかしながら，一つの問題発話に対して，ターンを超えた調整は別の調整としてカウントしており，調整の成功がその調整によるものか，調整を繰り返すことで成功につながったのかが不明である．例えば「繰り返し」自体が不要なわけではなく，自分の発話をもう一度繰り返してから相手の理解を確認し，次の調整へ繋げる役割をしていることなどが考えられるため，一つの意味交渉の中でどのように調整を重ねているのかにも着目する必要があるだろう．また，大平をはじめ，調整に注目した多くの研究では，NS が自身の発話を調整するやりとりのみに注目しているが，実際の会話では NNS の発話を NS が調整することも多い．その場合は相手の意図を正確に汲み取り，なおかつ相手が理解できる表現を用いる必要があるため，より難しい調整となると考えられる．この場合は意味交渉が長引くことが予測されるが，長引く意味交渉ではどのように調整が行われるのか，一度で調整ができなかった場合，どのように調整を重ねるのかについてはまだ明らかになっていない．

意味交渉の長さに着目した研究には，徳永（2000）がある．この研究では，意味交渉中の話題毎でユニットを分け，そのユニットが一つで意味交渉が終了するものと複数生じたものとに分類し，ユニットが 1 つで終了した意味交渉を「効率的な意味交渉」として，NS の適切な発話を探っている．分析の結果，NNS の上昇調の繰り返し発話に対し，NS が「はい」「そうです」などと返事をしたり，もう一度自身の発話を反復して応答したりするとすぐに意味交渉が終了していると報告している．徳永はこのような一度で終了する調整が効率の良い調整だとしているが，そもそもそれで解決できる意味交渉は問題解決が容易だと考えられる．問題が複雑である場合など，長引かざるを得ない意味交渉で何が行われているのかは明らかになっていない．また，NS の自己調整の分析だけでは，複雑な意味交渉の全体像をつかむには不十分である．

以上のことから，本研究では，NNS の発話に対して行われる NS の調整（発話の言い換えや修正など）が一度では終了せず，複数回にわたって行われる意味交渉に注目し，意味交渉の中で何がなされているのか，そのプロセスを明らかにするこ

[1] 意味交渉という相互行為の過程は，会話分析における修復(repair)によって開始される連鎖と重なる部分が多いが，本研究では第二言語習得に依って「意味交渉」の記述を行う．

とを目的とする．特に，相互理解を妨げている要因を NS がどのように特定しているのか，その後どのように相互理解を図っているのかに注目する．

3. データと分析方法

本研究で分析対象としたデータは，2021 年度から 2023 年度に行われた授業外での日本語母語話者（NS）と初中級日本語学習者（NNS）の日本語会話練習で，録音録画した会話を文字化して分析を行った．NS は日本語教育に関する知識，経験がない大学生で，アルバイトとして会話練習を行っていた．NNS は NS と同じ大学に通う留学生で，国籍は多様であった．会話データは 19 会話を対象とし，1 会話あたりの長さは約 20 分であった．会話の一部は感染症対策のためにオンラインで行われた．なお，全ての会話は協力者の同意が得られてから録音・録画をした．

分析では，まず意味交渉を抽出した．これは，何らかの原因でコミュニケーションに滞りが生じた時，その問題を解決するために発話の確認をしたり調整を行ったりする一連の相互行為である．次に，意味交渉を抽出したあと，そのやりとりの中から意味交渉が生じるきっかけとなった発話を特定し，それが NS と NNS どちらの発話かで分類した．そして，その問題を解決しようとする調整発話を特定した．調整は，大平（1999），増井（2005），柳田（2009）を参考に，一度発話された内容を別の言葉や表現で言い換えたり要約したりする発話や，相手の発話を引き継ぐ形で文を完成する発話，また，一度発話された内容をそのまま，もしくは部分的に繰り返した発話などとした．最後に，意味交渉中に調整が 2 回以上続くやりとりを抽出してその様子を質的に記述した．

4. 分析結果

分析の結果，生じた意味交渉は 190 回で，そのうち NNS の発話が原因で生じた意味交渉は 118 回であった．118 回の意味交渉のうち調整が 2 回以上行われた意味交渉は 50 回と，4 割ほどの意味交渉で調整が複数回行われていた．

まず，すぐに意味交渉が終了したやりとりに注目する．その多くは単語が原因で意味交渉が生じており，英語や他の言葉での言い換えによって調整を行っていた．また，文脈から NNS が述べようとすることを NS が正確に読み取れた場合もすぐに調整が終了していた．

事例 1

01	NNS-3	そうですね，あ::，神社．NS-3 さん，えーと，私はまだ日本まだたくさん日本見えません．
02		だから NS-3 さん，あ::: oh my god，recommen… 問題発話
03	NS-3	あ:，**レコメンド，オススメかな?オススメ．** 調整
04	NNS-3	あ: お願いします．

事例 1 では，NNS-3 が「recommend」の日本語がわからず，発話が滞っている例である．NNS-3 の英語の発話に対し（L02），NS-3 は NNS-3 が述べたいことをすぐに理解し，日本語で「オススメ」という語彙を提示することで調整を行っている（L03）．NNS-3 は「オススメ」という NS-3 の発話に続くように「お願いします」と述べて NS と共同で発話を完了させることで意味交渉が終了している．NNS-3 はこのように，単語が原因で意味交渉が生じた場合は，わからない単語が明確に示されているためすぐに問題源が特定できており，NNS が理解可能な言葉を NS が適切に提示できた場合は，調整がすぐに終了していた．

一方で，発話内容・発話意図の理解がすぐにできない場合は，NNS が何を述べたいのか，NS が丁寧に探っていく傾向があり，調整が長引く傾向がみられた．事例 2 では，NNS の非文法的で曖昧な質問を理解するために，NS が文法的な修正を行いながら具体例を提示し，段階的に質問の意図を確認して，相手の発話を理解しようとする様子が観察された．

事例 2

01	NNS-10	なんか日本::ですね，なんか日本の文化の中に，なんか，なんか，厳しいところがあるんですね，
02		いっぱい．だからどっちが 1 番厳しいと思いますか? 問題発話
03	NS-5	**どっちって日本の文化?** 調整 1
04	NNS-10	文化の中．
05	NS-5	**で，どれが 1 番厳しいか?** 調整 2
06	NNS-10	そうです．
07	NS-5	え:::，なんだろう，え，**例えば，仕事現場とか，そういうこと?** 調整 3

08　NNS-10　そうです.
09　NS-5　仕事現場だったら，その人間関係?
10　NNS-10　人間関係? はい.
11　NS-5　偉い人と，自分の立場?
12　NNS-10　うん.
13　NS-5　こう偉い人に，すんごい丁寧な,
14　NNS-10　丁寧な,［そう.　　［そうですね
15　NS-5　　［言葉で話さないと［いけないし,それ:::とか,やっぱ人間関係が1番,難しい部分(かなと).
16　NNS-10　やっぱり丁寧に話さ，話すのは，1番厳しいと思います.

事例2では，NNSの質問をNSがすぐに理解できなかったため，質問の意図を段階的に確認することで意味交渉を進めている．まず，NSはNNSからの質問「日本の文化の中に(中略)どっちが1番厳しいと思いますか?」(L01-02) を理解するために，まず「どっち」が何を指すのかを「日本文化?」と質問している (L03)．そして，「どっち」を「どれ」に言い換え (L05)，NNSの発話を正しい発話に修正し，ターンを超えて調整を行っている．さらに「日本の文化」が何を示すのかを「仕事現場とか，そういうこと?」と具体例を提示しながら相手の発話意図を確認している (L07)．NNSから同意が得られた後は，NSは「人間関係」(L09)・「偉い人と，自分の立場」(L11) と上昇調の発話でNNSの反応を確認し，理解できていることが確認できてから，最終的にNNSの質問に対する回答を提示している (L13，L15)．

このように，段階的な調整を行うことで，NNSのあいまいかつ非文法的な質問を具体化し，理解しようとしている様子が観察された．NNSの発話意図がすぐに理解できず，問題が内容・文法面と複数に及ぶ場合は，一度の調整で問題を解決することは難しいため，調整を重ねて一つずつ問題を解決することで結果として調整の成功に結びついたと言えるだろう．

また，意味交渉が長引く原因の一つとして，問題の特定が困難な場合があることもわかった．事例3では，NNSの「寿司が辛かった」という発言を，文法や単語の問題がないにも関わらず，NSが理解できずに意味交渉を繰り返していた．

会話例3

01　NNS-20　おいしい，とてもおいしいです．でも::,ちょっと．う::ん，ちょっと，辛いでした．　問題発話.
02　NS-8　辛い，わさび?
03　NNS-20　っと，エビのお寿司? エビの寿司?
04　NS-8　うん.
05　NNS-20　はい，ちょっと，ちょっと,
06　NS-8　**辛かった?**　調整1
07　NNS-20　から，はい.
08　NS-8　**辛い?**　調整2
09　NNS-20　ちょっとソース?
10　NS-8　あの中の緑色の?
11　NNS-20　あ::，あ::，あ: ソース.
12　NS-8　醤油?
13　NNS-20　お，お皿の，はいはい，そう**醤油，この醤油は，辛いでした.**　調整3
14　NS-8　**辛い?**　調整4
15　NNS-20　はいはい.
16　NS-8　**しょっぱい? 辛い?**　調整5
17　NNS-20　(笑い)
18　NS-8　**辛い?**　調整6
19　NNS-20　これ，ん:，これ，寿司，あ::，寿司が,
20　NS-8　うん.
21　NNS-20　えっと:，はい寿司でした，寿司，エビの[寿司.
22　NS-8　　［**お寿司? 辛い?**　調整7
23　NNS-20　はい.
24　NS-8　**スパイシー?［辛い:?**　調整8

25　NNS-20　[(It's sauce,) That was sauce, spicy sauce.　調整9
26　NS-8　あ::: なるほど::. 辛い, ソース.

事例3は，NNSが寿司を食べた経験について語っている会話で，NNSの寿司が「辛い」という説明に対し，NSは先入観からか「わさび」が辛いと考えたことから意味交渉が複雑化した例である．NSはNNSの「辛いでした」(L01) という発話に対し，何度も「辛い」を繰り返して正しい発話なのかを確認しようとしている (L06, L08)．NNSは寿司が辛いということを「ソース」(L09) という発話を加えて説明しているが，NSは辛いのは「わさび」だという確証を持つため「緑色の?」と質問している (L10)．しかし，NNSはそれを否定するように「ソース」を繰り返しているため (L11)，NSは「ソース」とは「醤油」のことではないかと考えて質問をしている (L12)．NNSが「醤油は辛いでした」とL01の発話を言い直す形で同意したため (L13)，NSは「辛い」が「塩辛い」という意味ではと考え，「しょっぱい」のか確認している (L16)．最終的に，NSが「辛い」とは「スパイシー」という意味なのかを確認し (L24)，NNSが英語で説明して (L25) 意味交渉が終了していた．

この会話例では，NSが「辛い」が何を示すのかをすぐに理解できなかったことが発端で生じている．NSは「辛い」が「塩辛い」を意味するのではないかと考え，語彙が原因で相互理解に支障が生じていると考えたようだが，実際は「寿司がスパイシー」というNSにとって意外な内容であった．つまり，NNSの発話に誤りはなかったが，NSが相手の発話に語彙的な問題があると想定してしまったのか，すぐに問題が特定できず二人の間で共通理解を確立することに時間がかかり，調整が長引く結果となった．NNSは初級学習者で日本語能力が高くなかったこともあり，NSはNNSの日本語力が原因で説明が正確でないと考えたことも，意味交渉が複雑化した原因ではないだろうか．このように，理解できない原因が言語の問題だけではない場合はすぐにその原因が特定できず，途中で調整が停滞してしまい，時間がかかる原因となることがわかった．

5. まとめ

以上のように，意味交渉が長引く原因は，相手の発話内容がすぐに理解できない点や，理解に困難が生じた原因が特定できない点にあることが観察された．経験してきた文化や会話の話題に関する背景知識がある程度共有されていたり，推測したりすることができる場合は，段階的に問題発話の焦点を絞っていく様子が見られた (事例2)．その一方で，それまでの会話を踏まえてNSが予想可能であったであろう内容とは異なる「予想外」の発話が見られた場合，NSから見た問題の特定に向けて，やりとりが長引いていた (事例3)．事例3で強調したいのは，NSが調整のなかで「問題」と扱っている発話が，NNS側にとっては問題のない発話，あるいは何が問題か遡及的にも分からない発話となっている点である．実際上記で見たように，NNSは自身の発話を「はい」と肯定し続け，さらに質問が繰り返されると笑いを見せていた．

ここから接触場面では，一般的に意味交渉を生起させる語や文法の誤りだけでなく，背景知識の相違も意味交渉の契機となり，NSは少なくとも上記の2点に注意を払いながら会話をしていることが示唆される．またそのような「予想外」の発話を解決するには，NSが会話上の様々な手立てやそうした会話が生起しうることを認識し，NNSの会話を支援しながら会話を進めることが重要であろう．また，NNSに対しては背景知識の差によって起こる意味交渉への会話ストラテジーを指導の中に含めることが必要になると考えられる．

参考文献

大平未央子 (1999)．接触場面の質問–応答連鎖における日本語母語話者の「言い直し」 多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集，3，67-85.

徳永あかね (2000)．接触場面における意味交渉での母語話者の発話–pushdownに注目した分析の試み– 接触場面の言語管理研究(千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書)，1，25-34.

増井展子 (2005)．接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化–共生言語学習の視点から– 筑波大学地域研究，25，1-17.

宮崎里司 (2002)．第二言語習得研究における意味交渉の課題 早稲田大学日本語教育研究，1，71-89.

柳田直美 (2009)．接触場面における母語話者の情報やりとりの特徴の記述–情報やりとりの発話カテゴリーの設定に向けて– 筑波大学留学生センター日本語教育論集，24，51-68.

柳田直美 (2010)．非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響–母語話者への日本語教育支援を目指して– 日本語教育，145，13-24.

雷雲恵 (2021)．相互行為の参与者はどのように発話のトラブルに対処するか–接触場面における日本語母語話者の「自己修復」に着目して– 言語文化研究科紀要，7，79-101.